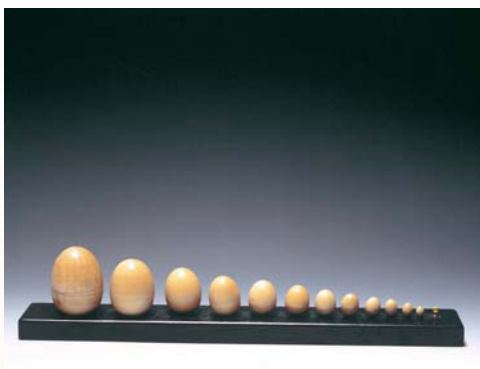


技が輝く

箱根・小田原地域には、樹種が豊富な箱根山系の自然を生かした木、漆等を素材とした貴重な伝統工芸技術が数多くあります。国の伝統的工芸品にも指定されている「箱根寄木細工」は、ご存知な方も多いと思いますが、今回は小規模ながら、その技が光る「組子細工」と「木象嵌」を紹介します。

◆組子細工（入れ子細工）

組子細工とは、ろくろを使って木を回転させて挽く挽物細工の一つ



十二卵

で、その歴史は古く、戦国時代にならざるに東海道を往来する旅人や箱根の湯治客のお土産として注目されるようになりまし。その中でも人気があつたのは、「十二卵」などでした。

「十二卵」は、上下二つに割ることができ、その中に一回りずつ小さい卵が順に十一個入っています。一つずつ割り、それを組み合わせると全部で大ききの違う十二個の卵が出来ることからその名が付きまし。ろくろを使い、卵の殻のように薄く、かつ上下がしっかりと閉まるように仕上げなければならず、熟練の技術と根気が必要とする作品です。

明治時代になると、「七福神」など十二卵を模した細工が誕生まし。ロシアにマトリョーシカという民芸品がありますが、箱根に滞在したロシア人が「七福神」を国に持ち帰つたことにより、生まれたという説があります。現在、この伝統の技を受け継ぐ職人は、箱根町の田中一幸さん、ただ一人です。

神奈川県

箱根・小田原地域の木製品



開運七福神

◆木象嵌

「木象嵌」は、さまざまな樹種の色を生かして、自由な曲線で板を象り、その板を嵌め合せて表現する技法です。日本画風の花鳥、山水や浮世絵などを題材としたものが多く作られてまし。

江戸時代からの手彫り象嵌に始ま



木象嵌

り、明治時代には、糸鋸ミシンを用いた挽き抜き象嵌技法が開発されまし。また、明治後期になると、特殊な大形の鉋を用い、種板をスライズすることが可能となり、量産もできるようになりまし。

木象嵌は、自然の木を用い、極めて精巧に表現するという特徴を持っています。そのため、材料となる木材の吟味や道具となる糸鋸の刃作り、板を挽き隙間なく嵌め込むことまで、高度な技術と経験が必要です。

お問い合わせ

神奈川県商工労働局

産業部産業技術課

TEL 〇四五―二一〇―五六三六

FAX 〇四五―二一〇―八八七一